

語彙意味論に適する「相互依存的」構成性 について

伊藤達也

はじめに

本論文では、語彙意味論に適する構成性原理のモデルとして、言語活動の形式性、認知における全体性の優位、意味構築における相互作用性を確認した上で、古典的なボトムアップ式構成性のモデルではなく、相互依存的なモデルを採用すべきであるという主張をする。

言語における形式性

近代言語学は、Saussure (1915) における *langue* の認識、すなわち言語は物の名前から構成される目録ではなく、他との差異によって消極的に定義される記号から成る形式的体系であるという認識から始まった。その後、音韻論をはじめとして、形式的対象である *langue* の構成要素（当然形式的な対象と見なされる）を記述するメタ言語自体の形式化が進み、究極的には二項対立的な弁別素性の組み合わせによる記述に発展した。形態論においても、A. Martinet の機能主義文法は、分布主義を採用し、代入や置換により操作される形式的体系の構成要素として形態素を記述した。20世紀後半には、より複雑な内容を持ちうる語彙研究、意味論の分野でも、弁別的素性による定義が導入された。これらの、言語に対する構造主義的アプローチは、動的な複雑さを含む言葉の意味さえも静的な形式へと還元する傾向を持っていた。

他方、合衆国に始まった生成文法 Chomsky (1957, 1968) は、文を生成す

る生得的文法能力の解明を目的とし、語彙の統語規則を代数モデルで表象し、語彙の意味部門は論理形式として括弧に入れた。そのため、意味論部門では、真理条件的意味論、いわゆる形式意味論が維持された。この形式意味論において、自然言語の文の意味は形式言語によって表象され、部分の意味の合計として全体の意味を計算する古典的なボトムアップ式の構成性原理が採用されている。

1960年代以降の生成文法の隆盛、その理想主義、非経験主義は、いくつかの批判を生み出し、とりわけ1980年代以降、人間の認知活動と自然言語の関係を重視する一連の認知文法、あるいは認知言語学 (Lakoff (1987), Langacker (1987-1991), Fauconnier (1984), Talmy (2000) が現れた。言語学史的には、ポスト構造主義言語学と呼ばれてよい時期である。

同時期に、語用論も急速に理論的自律性を高め、英語圏ではGriceの会話の公準の発展として、関係性理論 (Sperber & Wilson 1986) が登場した。フランスではO. Ducrotを中心とした論証理論 (Ducrot 1984) が発展した。

これら認知革命以降の言語学は、メタファーなど意味現象の重視、語彙と文法の分離の拒否、主体の重視などを特徴とし、言語現象を広い意味での人間の認知活動の反映と見なす。その結果、言語的事実の観察が、言語に固有の秩序の研究に使われるよりも、むしろ人間の認知能力の研究に利用され、最終的には、隣接分野である修辞学・文学理論、心理学、哲学、脳科学に吸収されて行く傾向を持っていた。したがって、英語圏の言語学的意味論においては、依然として真理関数的アプローチが支配的であり続けている。

20世紀後半の同時期、フランスのBenveniste (1976, 1980) における「言表 (énoncé)」および「発話者 (énonciateur)」の発見は、一般言語学のみならず人文社会学の歴史に変革をもたらした。しかしながら、その理論的重要性は十分認識されず、ポスト構造主義期のフランスではむしろ、隣接科学 (M. Foucaultの「考古学」、アナール派、「作者の死」(R. Barthes)) に

影響を与えることが多であった。また英語圏では、「発話者」の概念は、R. Jakobsonの提唱した「シフター」の概念と結びつき、物理的存在である「話し手 (locuteur)」と形式的存在である「発話者 (énonciateur)」との混同を招いた。また、発話行為 (énonciation) の発見は、Austin (1962), Searle (1969) による言語行為理論の影に隠れ、理論的重要性が十分に認識されないままであった。

したがって、「言表 (énoncé)」を生み出す活動としての「発話行為 (énonciation)」の理論化は、A. Culioliの理論的著作を待たねばならなかった。言語学の、経験科学から形式科学への転換を促す最初期の論文「言語学における形式化」(Culioli 1968)の最後で、著者は以下のように言う。

「このようなモデルを構築することは、言語活動を還元することの拒否、言語学を単なる個別的な現象の集積に帰することの拒否を意味し、理論的な諸問題の提起を可能にし、共通のメタ言語および厳密な種々の推論方法を強いることを意味する。こうすることで人は、言語学を公理化し、おそらくは形式化することが出来るであろう¹。」

(Culioli 1968, 引用はCulioli 1990 : 29より)

言語学の対象を「諸言語 (des langues) の多様性を通じて把握される言語活動 (langage) の科学」と定義するCulioliは、言語学の目的をlangueからlangageへと再定義した。さらに、主体間における言表の生産と認知からなるlangageそのものを、形式の生産と認知の複雑な活動と見なすCulioliの発話行為の言語学は、必然的に「形式的言語学 (linguistique formelle)」でもある。

Culioliによるこの「発話行為の形式的言語学」は、認知革命と並んで、現在のフランスの意味論の重要な理論的背景となっている。なかでも「図式形式 (forme schématique)」の概念は、相互依存的な意味構築の複雑なプロセスの中で、語彙の意味論的ポテンシャルの表象として、後述するよう

に、フランスの意味研究の主要な作業仮説の一部となっている。

意味の認知における全体の優先性

言葉の意味の認知は、広い意味での人間の認知活動の一部であり、他の認知活動と同一の原則が機能していると考えられる。本稿の扱う構成性の原理について、部分の合計を全体と見なす古典的な構成性が、認知活動においても有効と考えられるか、視覚の分野の例で考えてみる。

L. Wittgenstein は、『哲学探究』(Wittgenstein 1953) 第二部で、両義的な図像「ウサギ・アヒルの図」を取り上げ、ウサギのアスペクト(相)の認識時には、他のアスペクトは排除され、アヒルのアスペクトの認識時には、他のアスペクトは排除されるという認知上の現象「アスペクト盲」について語っている。

この図像の認知のプロセスは興味深い事実を明らかにする。すなわち人間の認知においては、全体形式(ゲシュタルト)の認知が、部分の認知より優先しているのである。認知のプロセスは部分から全体へ、すなわちある部分を「耳」と認知した後に全体をウサギと認知する、あるいは同じ部分を「くちばし」と認知した後にアヒルと認知するのではなく、まず全体形式を認知し、後に全体形式の認知から得られた情報に基づいて、部分(あひるの)「くちばし」ないしは(うさぎの)「耳」と認知しているのである。

図像は、物理的には、部分の情報の合計が全体であるが、認知的には、部分の認知を合計し全体が認知されているのではない。認知的なプロセスは、全体の形式が優先的に認知され、後にその認知に影響され、部分が認知されるという流れになっている。しかし当然のことながら、全体の認知にも部分は影響を与えている。全体を認知する際に部分の情報が必要だからである。したがって、全体の認知が優先するが、厳密には、部分と全体には相互依存的な関係がある。すなわち一方が他方を相互的に前提とするが、現実の認知プロセスでは全体形式(ゲシュタルト)の認知が優先されるので

ある。

視覚だけでなく、発話の意味認知にも同様のプロセスを想定できる。ごく単純な例をもちいると、「このはしわたるべからず」という文(発話)から、人はまず「禁止」という全体形式を認知し、その後に、部分である動詞「わたる」の意味を、後にその目的語としての部分「はし」に「橋」ないしは「端」という意味を割りふる。こうして最終的に、「はし」に相当する「橋」「端」の二つの可能性が文全体を両義的にしているのである。意味の認知の実際においては、直感的に、あるいは古典的な構成性原理が想定するように、ボトムアップ式に、単語の意味から出発して、すなわち「はし」の両義性の認知から出発して、全体を両義的な文と解釈するのではないのである。

同様に両義的な「ここではきものをぬいでください」では、まず始めに「命令」という全体の認知の後、「ここで、はきものを」「ここでは、きものを」という構成要素の分節の認知に及ぶ。(イントネーションを伴う発話であれば曖昧性は減少すると思われるが、句読点を抜かれた書かれた文であることにより、両義性が高まっている。) いずれにしても統語的な区切りよりも、全体像の認知が先に現れることは注目し得る。ここでは、「は」の発音(有声か無声か)が正書法上明らかでないため、全体の認知以前には、発話の構成諸要素が分割不可能であることが分かる。

要約すると、文とそれを構成する語彙要素の意味は、一方が決まると同時に他方が決まるという相互依存の関係にある。しかし、古典的な構成性の原理は、あくまでも部分の総体として全体を定義しており、ボトムアップ式のモデルを採用している。このような構成性モデルは、人間の認知に固有である全体の優位と、全体と部分との相互依存性を忠実に反映していない。このことから、発話(伝統的には文)の構成要素としての語彙単位(伝統的には単語)の意味を研究する語彙意味論においては、古典的な構成性原理ではなく、人間の認知活動に即した別の構成性のモデルが必要であることが分かる。語彙意味論に適切な構成性のモデルとは、全体の意

味が部分の意味に依存し、同時に、部分の意味が全体の意味に依存するような、発話と語彙要素の間に相互依存性を設定するモデルである。

意味構築における相互作用

Victorri & Fuchs (1996) の多義性の研究以来、言表およびそれを構成する語彙単位の意味は、発話以前に与えられているのではなく、発話ごとに種々の相互作用によって「構築される」という動的意味構築のモデルが提示されてきた。そのモデルに従うと、語彙単位は、Saussure 的記号、Chomsky 的論理形式とは異なり、発話の場において全体およびそれ自体の意味を、周辺環境に働きかけながら、動的に構築していく役割を担う中心要素である。

B. Victorri は、意味の動的構築が繰り広げられる場を、*scène verbal* (ことばの場) と呼び、その場において、環境 (*co-texte*) を召還 (*convocation*) しつつ、自らを喚起 (*évoation*) しながら環境との相互作用を通じて意味を構築するという動的意味論を提唱した。

さらに、「[...] 発話行為は言表を生産する主体の行為ではなく、言表を構成する諸形式 (プロソディー的なものも含む) の編集体から発して再構成されうるプロセスなのである²⁾。」と言う D. Paillard は、*scène énonciative* (発話の場面) という概念を新たに提唱し (Paillard 2009, 2011)、発話行為そのものの意味構築への関与の重要性を強調している。

Culioli において心的操作の痕跡にすぎなかった「言表を構成する諸形式」が、Franckel & Paillard (2007) 以降の意味論では、固有の「図式形式」に関係付けられる「語彙単位」として、意味の動的構築の中心に据えられた。「図式形式」は、古典的なボトムアップ式の構成性とは異なる、相互依存的な構成性の中での語彙の意味的貢献を定義するものである。

真理条件を計算するいわゆる形式意味論においては、形式化が代数モデルに倣うのに対し、発話の言語学から発展した意味論においては、幾何学とのアナロジーが用いられる。語意単位は「かたち」をもち、その「かた

ち」はゆがみ、ずれ、引き延ばされる、というトポロジ的「変形 (déformation)」の対象ともなり得るのである。三次元の映像をモニター上で反転、変形、拡大、する操作に似た操作が、意味の多様性を生み出す原理であり、この三次元的表象である「かたち」こそが「図式形式 (forme schématique)」なのである。

結論

差別的記号体系としての *langue* の認識と、*langue* が発話を介在とした主体間の認知的相互活動の中に位置づけられるという事実は矛盾しない。Saussure の言うように、言語記号は他の記号との差異によって消極的に定義されるが、そのような記号は発話の構成要素として、主体間の認知的相互活動の中に出現し、発話全体との関係で常に意味付けされている。その結果、語彙単位は、多様な価値 (= 意味) と関係づけられる全体の部分として、発話の場における出現事例を通じて形式を与えられ続ける。このような限りない形式の付与が差異体系の中で継続されることで「固有性 (singularité)」が獲得される。

語彙意味論に求められるのは、このような形式に正確な表象を与えることであるが、古典的な構成性の原理は、認知活動における全体と部分との相互依存性を忠実に反映していない。「図式形式」による語彙単位の表象は多義的な語彙だけでなく、あらゆる語彙の意味の認知に適する相互依存的な構成性原理の一部となるであろう。

参考文献

- Austin, J.L. (1962) *How to do things with words*, Cambridge.
Benveniste, E. (1976–1980) *Problèmes de linguistique générale* 1–2, Seuil.
Chomsky N. (1956–7) *Syntactic structures*, Mouton.
Chomsky, N. (1965) *Aspect of the theory of syntax*, MIT Press.
Culioli A. (1968) “La formalisation en linguistique”, *Cahiers pour l’analyse*, Seuil, pp.

- 106–117, Culioli (1999) *Pour une linguistique de l'énonciation*, tome 2, Ophrys, Paris, pp. 17–29.
- Culioli A. (1987) “La linguistique : de l'empirique au formel”, *Sens et place des connaissances dans la société*, CNRS, Culioli (1990) *Pour une linguistique de l'énonciation*, tome 1, Ophrys, pp. 9–46.
- Ducrot, O. (1984) *Le dire et le dit*, Editions de Minuit.
- Fauconnier, G. (1984) *Espaces mentaux, Aspects de la construction du sens dans les langues naturelles*, Editions de Minuit.
- Franckel, J-J. & Paillard, D. (2007) *Grammaire des prépositions, Tome 1*, Ophrys.
- Lakoff, G. (1987) *Woman, fire and dangerous things*, University of Chicago Press.
- Langacker, R. (1987–1991) *Foundations of cognitive grammar 1, 2*, Stanford University Press.
- Paillard, D. (2009) “Prise en charge, commitment ou scène énonciative, in *Langue française*, 162, pp. 109–128.
- Paillard, D. (2011) “Marqueurs discursifs et scène énonciative”, in Hancil S. (éd) 2011, *Marqueurs discursifs et subjectivité*, Presses universitaires de Rouen, pp. 13–39.
- Paillard, D. (2013) “Les marqueurs discursifs comme catégorie” in *Les théories de l'énonciation. Benveniste après un demi-siècle*, Université Paris Est.
- Saussure de, F. (1995 (1915)) *Cours de linguistique générale*, Payot.
- Searle, J. (1969) *Speech acts*, Cambridge University Press.
- Wittgenstein L. (2003 (1953)) *Philosophischen Untersuchungen*, Surkamp Verlag.
- Talmy, L. (2000) *Toward a cognitive semantics*, MIT Press.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *Relevance : Communication and cognition*, Oxford University Press.
- Victorri, B. & Fuchs, C. (1996) *Polysémie, construction dynamique du sens*, Hermès.
- Vu Thi N., & Paillard, D. (éds) (2013) *Inventaire raisonné des marqueurs discursifs du français*, Université nationale de Hanoï.

¹ Construire tels modèles, c'est refuser de réduire le langage, et refuser de ramener la linguistique à n'être qu'une collecte de phénomènes individuels ; c'est permettre de poser les problèmes théoriques, se contraindre à une métalangue commune et à des modes de raisonnement rigoureux. C'est ainsi que l'on pourra axiomatiser la linguistique et peut-être

la formaliser.

² [...] l'énonciation n'est pas l'acte d'un sujet qui produit un énoncé mais un processus qui peut être reconstitué à partir de l'agencement des formes (y compris prosodiques) qui composent un énoncé. L'énonciation est donc l'ensemble des déterminations (dont les formes qui la constituent sont la trace) qui interviennent dans la production de l'énoncé. (Paillard 2013)